

富山県射水市(新湊地区)  
放生津に関わる古地名調査メモ



「神保長誠」像(じんぼながのぶ):本覚寺蔵

射水市立放生津小学校総合授業  
2020年(令和02年)11月09日作成

桧物和広  
Kazuhiro Himono

# 目 次

1. まえがき	p-1
2. 地名	
①放生津	
②法土寺町	p-1
③四十物町	p-2
④紺屋町	
⑤立町・南立町・西立町・獅子絵田町	p-3
⑥三日曾根町・四日曾根町・善光寺町・長徳寺町	
⑦六渡寺町	p-4
⑧山王町	p-5
⑨中町	
⑩奈呉町	
⑪東町	p-6
⑫古新町	
⑬新町	p-7
⑭荒屋町・倉屋敷町・神保寺町	
⑮放生津城・二の丸・二の丸本町	p-8
⑯奈呉の浦	p-10
⑰放生津八幡宮	p-11

令和2年11月9日

# 放生津古地名

## 1. まえがき

低湿地帯の中央に放生津潟があり、庄川の乱流と放生津潟に注ぐ「鍛冶川・下条川は所々に微高地をを形成し、海岸線には約5mに達する砂丘がある。庄川河口と放生津潟を結ぶ内川は、古くから湊として利用された。

低湿地帯の殆どが水田に利用され、縦横に水路が通り船による交通路ともなっていた。

新湊町(放生津地区)は、1871年(明治4年)に成立し、2005年(平成17年)合併し射水市となった。

## 2. 地名

### ①放生津

放生津八幡宮「放生会」に由来する地名。

### ②法土寺町

町名は、元の「法土寺村」からきており、放生津内川南辺の二の丸地区を含んだ地域で、久々湊・石丸・放生津の入会地字今堀に鎌倉時代末期に栄えた。当時の「時宗」の放生津道場「報土寺」に由来する。

中世期には、報土寺(のちの専念寺)・光正寺(石丸山)が領内にあり、放生津守護所(放生津城)も近かった。「村名名附帳」(前田家文書)によれば、対岸の荒屋村と共に金屋村(牧野)の枝村とあり、正保4年(1647年)前田家古絵図には、村高34石が記入されている。

1714年(正徳4年)に現在地(立町)へ移転し、享保年間(1716年～)山王社(日吉神社)と曼荼羅寺との間に「七間町」が出来、現在の法土寺町の原型が出来たのです。

時宗は、鎌倉時代末期に興った、日本仏教浄土教の一宗派である。開祖は「一遍上人」であり、鎌倉仏教の一つでもある。(総本山は神奈川県藤沢市の清浄光寺:通称遊行寺)

「一遍上人」も真教上人も教団に所属している僧尼を「時衆」と呼んでおり、時衆が時宗に変化していったのです。

報土とは浄土を意味し、報身仏の住する世界。阿弥陀仏の極楽浄土もその一である。

仏語あり、一切の煩惱(ぼんのう)やけがれを離れた、清浄な国土。仏の住む世界。特に、阿弥陀仏の住む極楽浄土である。浄土宗は法然によって開かれた仏教の一宗派であり、称名(しようみよう)念仏(南無阿弥陀仏と口に称える)によって、阿弥陀仏の極楽浄土へ往生することを期す。

踊り念仏と一遍上人

『一遍聖絵』によれば、1279年(弘安2年)一遍上人の一行が善光寺への遊行の際で長野県・佐久地方で踊り念仏を行なう姿が描かれています。そこに法衣に身を包んだ僧侶や武士たちが輪になり念仏を唱えながら踊る姿が描かれます。これが一遍上人の一団が踊り念仏を行なった最初とされます。なかでも一遍上人を一躍有名にした「踊り念仏」がありました。

この「踊り念仏」が現在夏踊りとしての「のじた踊り」と考えられます。

当地域の開拓は、「時衆」に負うところが大きく、放生津潟岸の設定や街道の改修なども教団

の集団作業によったという(新湊市史)。かつて地内には、報土寺のほか光正寺(現本町2丁目)があった。江戸の初期(1603年 - 1700年ごろに東橋が架けられた結果、東内川沿いの法土寺町の家並みが東に延び「法土寺出町」と呼ばれた。また、山王社(日吉社)の横を抜けた横通りは、「七間町」と呼ばれ、同町南辺には、三軒町の名もあった。(曼陀羅寺文書)

1792年(寛政4年)立町焼け、1810年(文化7年)法土寺焼け(曳山も焼失)があり、1845年(弘化2年)法土寺町を火元とする「放生津大火」により、放生津八幡宮・東町神明宮・勝光寺・光明寺・本誓地・光山寺などの他民家490余戸を焼失した。この後1866年(慶応2年)に「法土寺町愛宕社」が創建された。

### ③四十物町

1688年～1704年頃に古文書に四十物町と標記されている。

町名の由来は、海産物の加工製造等に従事する人が多かったことに由来する。

「あいもの」とは、魚の「生物」と「干物」の「間物:あいだの物」のものを意味する。全部で「四十種類」あったので「四十」と書いたとされる。また、乾物は年中(始終→四十)食べられることから「四十」と書いたともいう。

また、東町と山王町の間(あいだのまち)の由来を表現する話も伝わっている。

### ④紺屋町

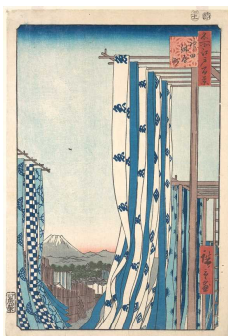
町名は、北の山王町から内川を隔てて「向い町」と呼ばれていた。(1624年寛永～1658年 明暦)室町末期1548年(天文17)頃に「紺屋座」があったことに由来する。紺屋(こうや/こんや)とは江戸時代に染め物屋をさした言葉。もしくは、その店の主人を指す。「むらさき屋」とも言う。



江戸時代の紺屋

もともと、「紺屋」は中世に「紺搔き」と言われた藍染専門の職人を呼んだものだが、非常に繁盛したため、江戸時代には藍染に限らず染物屋全般の代名詞となった。

江戸の紺屋町を描いた広重の浮世絵



日本中に点在していたが、1615年には大坂、1721年に江戸、1756年に京都で、それぞれ紺屋仲間が成立する。天保の改革のときには株仲間禁令によって一旦、途絶えたが、1850年ごろの嘉永の再興令によって復活した。

絵心や色彩感覚が必要な職業からか、しばしば紺屋から著名な絵師を輩出した。代表的な絵師として、長谷川等伯、曾我蕭白、亜欧堂田善、小田海僊、鈴木其一、歌川国芳、大橋翠石などが挙げられる。

関西では染物、洗い張り、湯のしなど一切を引き受ける職業を悉皆屋(しっかいや)と言い、染物屋は紺染屋、茶染屋、紅染屋と分業的な名称で呼んだ。両毛地方では藍染以外の染業者を「合雑紺屋」と俗称した。江戸時代の染色工は使用する染料の種類によって四つのグループに分かれた。特に染色の困難な紫草を扱う紫師、冬季に染色を行う紅花を扱う紅師、矢車や椽などを扱い茶色系の多彩な中間色を染め上げる茶染師、長年の研鑽によってスクモ玉の発酵を調節しさまざまな布製品を染める藍を扱う紺屋である。

阿波の栽培農家が夏に収穫した蓼藍の葉を発酵させ乾燥させたスクモという原料を作る、これを搗き固めてボール状の塊である「藍玉」として海路で京坂や江戸へ運ぶ。紺屋はこれを藍甕に入れて木灰や石灰、ふすまを加えてその上で水を加えて加熱することによって酵素を活発にし染料を作る。この一連の作業を「藍を建てる」という。

## ⑤立町・南立町・西立町・獅子絵田町

町名は、南北に延びた町筋であることに由来する。(北陸浜街道に対して縦にある)

1684年(天和4年)から町名が記録されている。

1781年～1789年(天明年間)には、長朔寺の地子地(じしじ:土地を貸す))に「新規町」が出来、「地子新町」・「十銭町」・「西立町」が開かれた。また、南にも広がり「南立町」が1862年(文久2年)に開かれた。西神楽川は、度々洪水を起こしていたので、直川にて内川へ流すことを願ったが、放生津周辺の村の反対で実現しなかった。1861年(文久元年)の出水後ようやく西立町南端から直川され、滞水地帯は整地されて1875年(明治8年)東側を「江柱」とし西側を「獅子絵田」と呼んだ。

町の中央に鎮座する「日吉社」は、元は山王社・山王権現と称し「山王町」に鎮座した社であった。1714年(正徳4年)現在地に遷座され明治に入り「日吉社」となる。

## ⑥三日曾根町・四日曾根町・善光寺町・長徳寺町

「吾妻鏡」(鎌倉時代に成立した日本の歴史書)によると、1239年(延応元年)越中国東条・河口・曾根・八代(現在の氷見)の4箇保地頭らは、九条道家に対して、京都東福寺領地として、京上年貢100石の地頭請所契約でその所職を寄進している。

その後九条家の支配は不安定化し、南北朝期(室町時代1368年-1392年には、幕府と深い関係をもつ「奈良西大寺末善興寺」(現廃寺)が曾根地内に設立された。いろいろな時代変遷があるが、今も「善光寺」としての地名が残っている。

また、「奈良西大寺末善興寺」の尼坊を「長徳寺」と言い、紺屋町の「大楽寺」は元「長徳寺」と称した。長徳寺は、「南長徳寺」に寺地があったと言われている。

「三日曾根村」は、大村で後に「四日曾根村」を分村したと言います。1648年～1652年(慶安年間)には、放生津町寄りに集落が出来「三日曾根出町」と呼ばれた。

同町の東部に「横町」、「横町」と連なる縦(たて:上下方向)の町に「やくわん町」の地名がのこる。もともと、「曾根・曾根(そね)」とは、日本の苗字、地名である。

「ソネ」の語は、河川の氾濫などで伸びた高地を意味し、自然堤防を指した。また、塙(そね:石の多い、やせた土地)と書き、石の多い痩せた土地を指す。このことから、この放生津に流れるの「上牧野川・牧野川・前田川・田町川・大石川・西神楽川」などの内川支川が作り出した地域であり、地名であると思います。

## ⑦六渡寺町

「六渡寺村」には、「六道寺」という大きなお寺があったことに由来する。

六道(ろくどう)とは、仏教において衆生(人間)がその業の結果として輪廻転生(人が死ぬと新しい生命に生まれ変わる)することの「6種の世界」のことです。

#### 1. 天道(てんどう)

太陽が天空を通過する道をさすが、天体の運行には一定の規則性があるため、転じて天然自然の摂理、天理を意味するようになった。

#### 2. 人間道(にんげんどう)

人間道は人間が住む世界である。四苦八苦に悩まされる苦しみの大きい世界であるが、苦しみが続くばかりではなく楽しみもあるとされる。また、唯一自力で仏教に出会える世界であり、解脱し仏になりうるという救いもある。

#### 3. 修羅道(しゅらどう)

修羅道は阿修羅の住まう世界である。修羅は終始戦い、争うとされる。苦しみや怒りが絶えないが地獄のような場所ではなく、苦しみは自らに帰結(きけつ:最終的に行き着くこと)するところが大きい世界である。

#### 4. 畜生道(ちくしょうどう)

畜生道は牛馬など畜生の世界である。ほとんど本能ばかりで生きており、使役されるがままという点からは自力で仏の教えを得ることの出来ない状態で救いの少ない世界とされる。

#### 5. 餓鬼道(がきどう)

餓鬼道は餓鬼の世界である。餓鬼は腹が膨れた姿の鬼で、食べ物を口に入れようとするとなつてしまい餓えと渇きに悩まされる。他人を慮らなかつたために餓鬼になった例がある。

#### 6. 地獄道(じごくどう)

地獄道は罪を償わせるための世界である。地下の世界。

このうち、天道、人間道、修羅道を三善趣(三善道)といい、畜生道、餓鬼道、地獄道を三悪趣(三悪道)という。

小矢部川河口には、六渡寺湊があり、北前船の拠点として栄えた。渡船場は、現在の庄西町の1丁目の「八嶋倉庫付近」に位置し、江戸時代上流の上渡し(能町渡)に対し下渡しと称し、また、「大渡し」とも呼んで放生津湊口の小渡しに対称された。

六渡寺湊から小矢部川をさかのぼり、砺波・石動方面へ、千保川・野尻川に通ずる舟運が開かれていた。1609年(慶長14年)前田利家が高岡城を構築した時も、資材運送に利用された。また、能登方面の物資の多くは、六渡寺湊で中継されて内陸部に運ばれました。

### ⑧山王町

山王社(現日吉社)が鎮座したことに由来する。1581年(天正9年)神保長住は、放生津の八幡領町・同三宮方に制札を発給しており、山王社は、三宮方に含まれたと考えられる。1714年(正徳4年)には、立町へ移ったとしています。

1854年～1860年(安政年間)には、放生津町の「町年寄り役」の「大西家」が放生津八幡宮祭礼で奏でる「太鼓台」を寄進し、後に曳山の列にも加わり「大旗台」と愛唱された。(現存)

## ⑨中町

奈呉町の東に位置し、東は山王町。浜往来が通る。北は富山湾に面し砂浜が続く。大通り(浜往来、中町通り)の奈呉町境には放生津町の「高札場」が立っていた。大きさは、高さ1丈5尺(約4.5m)／長さ3間5寸(5.15m)／幅6尺(1.8m)(新町万覚帳:近岡文書)であった。高札場南の内川には放生津新町へ至る「中橋」が架けられていた。1692年(元禄5年)放生津町の町年寄役で「四十物問屋の松屋武兵衛」が八幡宮祭礼時の曳山を「御神楽山」として再建し、1765年(明和2年)には板車の太鼓山に改良し、更に1796年(寛永8年)「御神楽式回転山」という特殊な構造をもつ「通称:廻りズッコ(老人)」と言われる曳山を作成した。

## ⑩奈呉町

町名は「万葉集」にみえる「奈呉の浦」に由来する。町中央には内川をせにして「気比神社・住吉社(現気比住吉神社)」が鎮座している。中世当地一帯は、越前敦賀の「気比神宮領」であった。気比宮の門前地は「宮町」、後の「恵比寿町」と称され、西方を「大奈呉」と呼んでいた。

内川の湊口には、「魚場」があり栄えた。しかし、1821年(文政4年)放生津町大火で逃げ道を失った多くの人達が焼死した。そこで内川の湊口に「長さ32間(57m)」の湊橋が架けられ、浜往来は古新町から湊橋を渡って中町を通ることになった。内川の「中橋」は、1650年(慶安3年)に架けられたが、1688年(貞享5年)に中町の境目に架け替えされた。放生津八幡宮祭礼時の曳山は、1692(元禄5年)に創建された。

「気比住吉神社」は、1880年(明治13年)住吉社が炎上し、以後、「気比神社」(気比宮)に仮鎮座したが、1928年(昭和3年)両社が合祀(ごうし)され現社名になっている。住吉社の祭神は、奈呉の浦海中より迎えた神「表筒男命・中筒男命・底筒男命」とされ、気比神社の祭神は、「仲哀天皇」である。気比神社が勧請されたのは、鎌倉時代初期以前(1185年以前)で、奈呉の浦一帯が越前敦賀の気比神宮の神領であったことによる。

鎌倉後期(1192年-1333年)から室町期にかけて(室町時代1338年-1573年)越中では、放生津を中心に「時衆」の発展が目覚ましかったが、時衆がこの越前・越中の気比神社の発展に深く関わっていたことが、気比社の発展の背景にある。

漁場(市場)は、1715年(正徳5年)に、これまでの「特権的40集商人制度の6人間屋」から、新しく生魚漁場改所を設立し、1717年(享保2年)には、仕法書12ヶ条が定められ魚吟味6人によって運営されることになっていった。

漁場は、「魚売り場・算用場・魚改場」からなり、改所では「突棒・槍・長刀・十手・差網・手枷(てかせ)」などを常備していた。また、漁場への出入りは登録制で「魚商鑑札」を受けた。

1715年(享保の頃)の鑑札所有者は、70人～80人で200人程の手合(下買)がいたが、1781年～1789年(天明の頃)には、鑑札所有者は130人と増えていった。

また、四十物商売(塩干物)35人／行商23人を数えた。

1821年(文政4年)3月28日の放生津大火は、瞬く間に1150戸を焼き払い、湊口に逃げた住民は橋がなかったため、48名も焼死しました。この地獄絵さながらの光景は加賀藩檢視役人の同

情を呼び、長さ30間(55m)、幅9.5尺(2.9m)の板橋が架けられ、俗に「おたすけ橋」と呼ぶようになりました。古新町と奈呉町を結ぶ唯一の橋となりました。明治28年「湊橋」と改称しました。

## ⑪東町

荒屋村の北に位置し、西境は東町大通りに面して鎮座する「神明宮」。北は富山湾で砂浜が続く。町東方に「放生津八幡宮」が鎮座する。放生津町の浜往来は、八幡宮を門前に面し、同社横をって放生津湍の北、明神新村へ延びていた。

当町の浜は、「東浜」と呼ばれ「東浜納屋」1,673歩余りがあった。

(1歩(日本では伝統的に長さとしては6尺、面積としては6尺平方である。つまり、長さとしては1間、面積としては1坪に等しい。)

また、同地の大松は、放生津沖の「台網敷設」の目印となっていた。

1848年～1854年(嘉永年間)放生津八幡宮北の砂浜べりに放生津台場を築く計画があった。(放生津八幡宮社地絵図:高樹文庫)。

当町在中の御用木材商の「木屋弥兵衛」は、放生津町の初代町年寄役を勤めた。木屋が自前を出した豪華な曳山は、放生津八幡宮祭礼における東町曳山のはしりとなった。曳山は、1718年(享保3年)の創建であった。

## ⑫古新町

1649年(慶安2年)放生津新町町立以前は、「浜新町・西の浜」と呼ばれていたが1661年～1673年頃から「古新町」と称されるようになった。(新湊市史)湊口に面して潤改所(まあらためしよ:税関)が置かれ、住吉社(現観音堂)がその南に鎮座していた。

湊口は、「小渡」と称され、1821年(文政4年)に湊橋が架けられた。

当町の「尾山屋久右衛門」は、有力な魚問屋で、1598年(慶長3年)に放生津八幡宮の祭礼に自前の曳山を仕立てて西放生津を曳き回った。これが放生津町における初めての曳山で、「くじ抜け1番」として各曳山の先頭に曳かれるようになった。

## ⑬新町 (字:市町村内を小区分した地名表示)

町名は、「放生津新町」に由来し、単に「新町」とも通称される。1649年(慶安2年)内川縁の三日曾根村字稲荷の五千歩と四日曾根村字来光寺川田割五千歩と合わせて一万歩を割って成立した町である(野村屋旧記)。1656年(明暦2年)には、地子米皆済状(上納米)や銀納(年貢の代わりに銀上納)をする際、大石川を境に東新町・西新町と区分され、それぞれに二人の組合頭を置き、町肝煎り(世話代表方)が統括した。

1748年(寛延元年)放生津湊の給人米(武士に支給される米)11,600石の出津米割出表によると、3軒の蔵宿を始め、「渡海船の船持・網元・酒・醤油・味噌などの醸造業があり、諸雑貨品を販売する商店が建ち並ぶ、放生津町と共に射水郡の商業の中核をなしていた。(新湊市史)

1844年(天保15年)江戸城本丸焼失に際し、80,000両の上納割当金を受けた加賀藩は、領内の富裕商人から銀2,970貫を借銀したが、「新町の綿屋彦九郎」が150貫目を上納した。1848年～1854年(嘉永期)の発行とされる「見立角力三ヶ国長者鏡」によれば、「放生津新町の綿屋彦九



郎」は、「西方関脇」と記載されている(石川県史)。

銀：150貫目 銀一貫は現代で約1,250,000円です。

$1,250,000 \times 150 \text{ 貫} = 1 \text{ 億 } 8750 \text{ 万円}$

金1両：銀貨60匁(もんめ)：75,000円

銀：150貫目：2,500両

## ⑭ 荒屋町・倉屋敷・神保寺

1663年(寛文3年)には、加賀藩の御蔵5棟、大作食米御蔵1棟の他、御蔵番屋敷2棟が建てられた。後に大作食米御蔵は廃され、内川対岸の放生津城跡に新設された放生津御蔵に合併された。また、塩問屋松屋定次郎が御塩中出蔵3棟を村北辺に建てた。1778年(安永7年)の家数は58軒、1833年(天保4年)94軒、1859年(安政6年)145軒を数えた。

1835年(天保6年)の放生津の大火で荒屋村及び御塩中出が蔵類焼し、その後整地され跡地に「倉屋敷」が建てられた。1845年(弘化2年)の大火でも荒屋村、放生津東町東部が全焼し、東町光明寺横道の東裏通りかけて、荒屋村の新規町である「今町」ができた。

荒屋の「不動はん」と通称される「曹洞宗西福寺」は、1900年(明治33年)に宮城県仙台市から移ってきた。「鎮守は、荒屋神社、倉屋敷町は、東町神明宮」としている。

町中央を東町西部へ通じる通称した「倉屋敷道」が南北に貫き、この道の北端砂浜沿いに、かつて倉屋敷の鍵を管掌したことにちなむ「倉ノ丁」の地名が残る。

当地の神保寺地内内川縁に、富山商船学校が誘致された。

富山商船学校は、全国に5つある商船高専のうち唯一日本海側にあり、百年の歴史の中で、数多くの国際航路の船長、機関長を輩出した。1985年までは全寮制で、女性は入学できなかった。現在は「射水市立新湊中学校」となっている。

1906年(明治39年)7月3日 - 新湊町立新湊甲種商船学校として創立。

1909年(明治42年)4月1日 - 富山県へ移管、富山県立商船学校となる。

1925年(大正14年)4月1日 - 機関科設置

1939年(昭和14年)8月19日 - 文部省へ移管、富山商船学校となる。

2006年(平成18年)7月3日 - 創立100周年を迎える。

2009年(平成21年)10月 - 富山工業高等専門学校と統合し現在は、「富山高等専門学校」(射水キャンパス)となっている。

平成21年10月に富山工業高等専門学校と富山商船高等専門学校の統合・高度化再編によって誕生しました。工学系4学科、人文社会系1学科、商船系1学科の計6学科及び4専攻から成る専攻科があり、多様な教育研究分野を有していることが大きな特徴です。

「創意・創造」、「自主・自律」、「共存・共生」を教育理念に掲げ、分野間の連携と2キャンパス間の距離を超えた融合を図って、教育・研究・地域貢献活動を行っています。

本郷キャンパスと射水キャンパスの2キャンパスを有する統合・高度化再編校です。

全国51の国立高専のうち4校しかない統合・高度化再編校の1つである本校では、単に業務を的確に行うのみならず、柔軟性と実行力をもって他の教職員と協同して、より質の高い教育・研究支援や地域貢献を推進していく力となる職員の育成を目指しています。

## ⑮放生津城・二の丸・二の丸本町

名越流北条氏(なごえりゅうほうじょうし)は、鎌倉時代の北条氏の一族。鎌倉幕府2代執権・北条義時の次男・北条朝時を祖とする。名越の地(鎌倉)にあった祖父・北条時政の邸を継承した事により名越を称し、母方の比企氏(ひきし)の地盤を継いで代々北陸や九州の国々の守護を務めた。

鎌倉幕府の滅亡に繋がる1333年(元弘3年)「元弘の乱」では、名越流最後の当主・北条高家が六波羅探題救援六波羅探題(ろくはらたんだい)は、鎌倉幕府の職名の一つ。承久3年(1221年)の承久の乱ののち、幕府がそれまでの京都守護を改組し京都六波羅の北と南に設置した出先機関。探題と呼ばれた初見が鎌倉末期であり、それまでは単に六波羅と呼ばれていた。のため足利高氏と共に上洛し、後醍醐天皇方と戦って討ち死にした。

越中守護であった名越時有(北条時有)は越中守護所(放生津城)で戦ったが反対派の御家人にに囲まれて敗れた(この様子は『太平記』にも悲話として伝わっている。)反幕府側の御家人に囲まれて落城する際の光景は『太平記』に記述されるものとなった。

鎌倉幕府の越中国守護所として、正応3年(1290年)に執権北条氏の命を受けて北陸道の守護職として越中国に赴任した名越時有(北条時有)がこの地に城を築いています。

それまでの放生津城付近には、鎌倉中期(1222年～1287年)に守護所(行政機関)が置かれ、北条一族で守護職を勤めておりました。

その後、室町期(1336年～)には、畠山氏が守護となると、1443年(嘉吉3年)「神保氏」が、婦負・射水の二群の「守護代」を勤め、「放生津城」を居城(きよじょう)とした。1493年(明応2年)足利義材が細川政元によって將軍を廃されると(跡目相続争い)、京都を脱出して、放生津の神保長誠(じんぼう ながのぶ)のもとへ逃れ、同7年まで滞在しました。

足利義材(よしき) / 義尹(よしただ) / 義種(よしたね)像

この地で「越中公方」として放生津政権を樹立しています。「越中公方足利義材」のもとへは、公家・大名が出仕し、禅僧、歌人ら多くの文化人も訪れるようになり、これにより放生津は北陸の政治・経済・文化の中心地として栄えています。この地は海に近く港があり、交通の便も良く、京都から船で移動するにも便利だったことが背景にあるでしょう。

この頃は、神保氏が極めて強勢だったと言えます。そうでなくては將軍がこの地へ逃れてくるとは思えませんので。

將軍が越中に逃れてきたのはもう一つ理由があり、神保氏の主君である畠山政長が細川政元に滅ぼされていて、それを恨みに思っている神保氏であれば、快く自分をかくまってくれるであろうという読みがあったの



だと思われます。

後に足利義材は将軍職に復帰しますが、管領細川高国と対立して、再び逐電することになり、大永3年(1523年)4月9日(4月7日とも)に阿波撫養(現在の鳴門市)で死去しています。享年58才でした。

戦国時代は、神保慶宗(じんぼう よしむね)が当主となり、1520年(永正17年)神保氏は越中へ侵攻した「長尾為景」(越後国の戦国大名。越後守護代・越中国新河郡分郡守護代。上杉謙信の実父。米沢藩初代藩主・上杉景勝は外孫に当たる。)に敗れ、富山の新庄で戦死した。

1585年(天正13年)「羽柴秀吉」による佐々成政攻めに際し、前田氏の武将「奥村永福」が能登の末森城(押水町)から移って浜往来の押さえとして「放生津城はとても重要な城だ」としています。

「前田家」治下には中川光重、山崎長鏡が城代を務めたが、元和の一国一城令により廃城となったとみられる。「放生津城」も長尾軍の攻撃で落城し、焼失してしまいます。このため、神保氏は一時衰退するものの、神保慶宗の子、長職が神保氏を再興して1543年(天文12年)には富山城を築城して拠点をここに移しています。

放生津城も神保氏の手によって再建されたと思われます。しかし越中国は、この後は上杉軍と一向一揆勢、さらには織田軍の草刈り場と化していました。

放生津城は、神保氏時代は守山城の支城となっていたと思われますが、守山城主「神保氏張」(うじはる)は上杉軍が侵攻してくるとこれに降り、織田軍が侵攻してくると、佐々成政に降ると、どちらもうまく立ち回っていたので、放生津城も落城の憂き目には遭わなかったのかもしれませんが。

天正13年(1585年)には佐々成政が豊臣秀吉に降伏して、越中国は前田氏の領地となり放生津城も前田氏の持ち城となります。

しかし、放生津城は江戸時代の初め頃までに廃城となっています。この時点では、既に戦略的価値がなくなっていたと思われるので城としては廃城になったと思われますが、この城は海に近いので舟を城の内部にまで引き入れて荷物を搬出入するには便利だったので城跡は明治時代まで前田家の米蔵屋敷として使われていたようです。

その後、天正9年(1581年)に織田軍の攻撃により落城し、佐々成政が重臣・佐々平左衛門や佐々源六(勝之)、直属の馬廻り衆を入れて守っていた。

(越中 放生津城-城郭放浪記)

二の丸は、城の本丸の外側を囲む城郭を指すものであり、外敵を防ぐための防御施設である。城内は、本丸・二ノ丸・三ノ丸・西ノ丸・北ノ丸等と表現され、その周辺には、藩主の住まいや政務の場としての中核的場所を占め、重臣たちの邸宅があった。

江戸時代の「柴家の放生津城総絵図(部分)」では、「御蔵」を中心に「二の丸割・二の丸後割」の記載がある。

## ⑩ 奈呉の浦

「奈呉の浦」(なごのうら)は、富山湾(越中国)と大阪湾(摂津国)の二か所の歌枕があります。それぞれ万葉の時代から詠まれている。富山の方は大伴家持とその取り巻きメンバーにより秀歌が残されています。

大阪の方は、住吉の海岸のことでありますが、現在では場所を特定できません。その他「那古の浦」と書いて、四日市の沖合の海を指すことがあり、蟹気楼で有名です。

### 奈呉の意味Ⅰ

「なご」の由来としては、名前の由来は、鹿児島で帯のことを「きび」といい、この魚の体に走っている線が帯に見えることから、「きびなごと」付いた。なごは、「小さな魚」という意味だとしています。

「ちめんじゃこ」のような「小さい魚」の呼び名は、

1. きびなご(漢字では、黍女子・黍魚子・吉備女子、吉備奈仔)
2. いかなご(こうなごとも呼ぶ:漢字で書くと「小女子」。)

きびなごは、体側に美しい銀色と青の帯をもつ小さな魚で、産卵期である春先に多く獲れたことから、昔は肥料として、またはカツオやタイの一本釣り用の餌として、利用されていました。漢字表現は、それぞれが当て字だと思うが、共通して言えることは、小さな女の子のように、かわいい小魚」と言う表現では一致する。

また、「那古」の意味でも、「美しい・ゆったりとした・豊かさ」と昔の豊穰の海(放生)の海面に小魚が溢れている様子が目に浮かぶと感じております。

「奈呉の浦」の名前の起源は、定かではないが、私達の先人の思いは、「豊かさと感謝」のような気がします。

### 奈呉の意味Ⅱ

「奈」は、「からなし」という果樹を意味する漢字です。「からなし」は漢字で「唐梨」と書き、バラ科のカリンの別名とされ、古くはベニリンゴを表す名称としても使われています。

「奈」は本来、「木」と「示」をくっつけてできた「柰(ダイ)」という文字でした。「示」はお祈りなどの神事で使われる文字で、「大(木)」は大地をおおう大きい樹を表すことから、「神事に用いられる果樹」を意味するようになりました。

また、呉市の説明文には、船用材の樽(くれ)の製材を生業する船木郷があったことから「樽(くれ)と呼ばれ「呉」になった!としています。…

樽(くれ)とは、①東方の日の出る所にあるという神木の名「樽桑」(ふそう:日本歳時記)に用いられる字。②くれ。へぎいた(折ぎ板:杉・檜(ひのき)などを薄く削って作った板。折敷(おしき)・折り箱などを作る。)。また、皮のついたままの丸太を意味します。

「奈」と「呉」を別の字で書くと「柰」・「樽」になるが、「唐梨」(ベニリンゴ)を祭壇にささげ、「樽(くれ)で造船した舟の安全を祈る「浦」の神社が「奈呉の神」と言うことになる。

## ⑰放生津八幡宮

大伴宿禰家持卿が、746年(天平18年)越中国守(こくしゅ:1 越中の長官)として、赴任し「豊前国宇佐八幡大神」を勧請され「奈呉八幡」と称したのが始まりとされている。(宿禰:すくね:武人や行政官を表す称号/卿:きょう:高位の官職)

1772年～1780年(安永年間)に記された「町年寄:松屋(泉田家)の文書(松屋文書)にも、八幡宮について、「大伴家持」が宇佐八幡神を勧請したことと、729年～749年(天平年間)より連綿と「放生会」が営まれてきたことや、「八幡宮の放生会」が放生津の地名になったこと等が記載されています。1312年(嘉暦3年)に地名が改められたとあります。

「太平記が語る、鎌倉幕府の滅亡の5日前、放生津城(奈呉城)での「名越時有一族滅亡」を伝える哀史(あいし:悲しい出来事をつづった物語)が残されている。南北朝の動乱で、南朝方の武士を頼って武士を頼って、寺泊から放生津に遷られた(うつる)宗良親王(むねよししんのう:鎌倉時代後期から南北朝時代にかけての皇族。後醍醐天皇の皇子)。南朝方に味方した「姫野一族の領地」を取り上げて「石清水八幡宮」寄進した3代将軍「足利義満」。1493年の「明応の政変」で幽閉された10代将軍「足利義材」を越中守護代である「神保長誠」が助け出し放生津を御座所とし「越中公方(くぼう:将軍)」とした。

放生津に小幕府が出現し、「足利義材」を慕って都から公家・武家が集まり、都の文化

南北朝時代(1336年から1392年までの57年間を指す)

足利尊氏が京都で新たに光明天皇(北朝・持明院統)を擁立したのに対抗して、京都を脱出した後醍醐天皇(南朝・大覚寺統)が吉野行宮に遷った時期で、北と南で争った。

「明応の政変」により、将軍は足利義材(義植)から足利義暹(義澄)へと代えられ、以後将軍家は義植流と義澄流に二分された。

が花開いた放生津であった。

1563年(永禄6年)越中平定を目指す「上杉謙信」を放生津で迎え撃ち、一戦を交えた「神保長衡」(じんぼながひら)・椎名泰胤(しいな やすたね)・江波三河守らの武将と一向一揆勢と参戦し、敗北した。

この時、「放生津八幡宮」も焼失し、後に「神保氏」が再建した伝えられる。1576年(天正4年)守山城も平定した「上杉謙信」が、放生津で「十楽の市」(自由市)を開いたと伝えられています。数年後、1581年(天正9年)「神保長住」は、八幡宮領町に商業保護の制札をだしている。

この時、「神保長住」は、織田信長の家来になっていたが、やがて追放され、放生津城は、前田利長公の家来「山崎長鏡」の居城となる。

(放生津八幡宮社殿再建150年記念小誌より)

## ⑱あとかき

今回の調査に際し、無知な自分に「ホトホト・・・」嫌気が指し、それなりにまとめたつもりですが、地域によっては、調査不足を強烈に感じております。これから時間の許す限り精進致しますので御容赦願いたく申しあげます。

参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・

1. 日本歴史地名大系(平凡社)
2. 放生津八幡宮社殿再建150年記念小誌
3. 射水市資料
4. 「見る新湊近代百年小史」新湊市役所
5. 「新湊市史」新湊市史編さん委員会
6. 「放生津城を掘る」:久々忠義
7. 「コトバンク」(NET:PC):フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』